

第2期中野区子どもの権利委員会 中間答申
（案）

令和7年(2025年)6月
第2期中野区子どもの権利委員会

はじめに ～中間答申にあたって

諮問から中間答申までの経緯等を記載予定

令和7年6月30日
第2期中野区子どもの権利委員会
会長 内田 塔子

<目次>

子どもの居場所に関する提言

1 子どもの居場所に関する現状と課題

- (1)子どもの居場所に関する社会的背景の変化と子どもの居場所の必要性
- (2)中野区の子どもの居場所に関する現状

2 子どもの居場所のあり方

<付属資料>

- ・ 付属資料1 第2期中野区子どもの権利委員会への諮問について
- ・ 付属資料2 中野区子どもの権利に関する条例
- ・ 付属資料3 中野区子どもの権利に関する条例施行規則
- ・ 付属資料4 第2期中野区子どもの権利条例委員名簿
- ・ 付属資料5 第2期中野区子どもの権利委員会の開催状況
- ・ 付属資料6 子どもの意見聴取の実施状況

1 子どもの居場所に関する現状と課題

（1）子どもの居場所に関する社会的背景の変化と子どもの居場所の必要性

子どもの居場所の定義

- 子どもの居場所について、家や学校などのような物理的な場所に限らず、遊びや様々な体験活動、人間関係なども子どもにとっての居場所となりえると考え、それら様々な要素を含めたものを子どもの居場所と定義し、審議を行いました。

子どもを取り巻く環境の変化

- 少子化、保護者の就労状況の多様化に加え、新型コロナウイルスの感染拡大によるコミュニケーションや人との距離の取り方、その他様々な価値観など、子どもを取り巻く環境は大きく変化しています。

子どもの居場所となりうる場所の減少

- 様々な社会状況の変化により、子どもが自由に遊び、過ごせる場所は減少しています。
- 例えば、公園ではボール遊び禁止などのルールが設けられているところも多くあり、自由な過ごし方が制限されています。同様に、放課後の校庭なども自由に過ごすことが難しい現状があります。
- また、かつては子どもの居場所となりえた空き地のような自由な空間は、都市の構造が変化していく過程でほとんどなくなっています。
- 都市の構造の変化は、道路が整備されるなど、暮らしやすい環境が整えられる一方で、空間が目的別に整備されているため、遊びやゆとりのある、自由な空間が失われてしまいます。
- こういった状況は、子どもにとって、日常生活において自由にのびのびと過ごせる場所、ひいては「居場所」と感じられる場所が奪われてしまうこととなります。

- また、子どもの居場所が減少している中で、子どもたちが家の外で集まるには、カフェやカラオケ、スタジオなど、費用がかかる場所を選ばざるを得ない状況もあります。
- こういった場合は、気軽に安心して過ごせる居場所とは言い難く、また、経済的理由で利用できない子どもにとっては、居たいと思う場所に居られない状況となってしまうことも考えられます。

地域コミュニティの希薄化による子どもや子育て家庭への影響

- 近年の核家族化、共働きをはじめとする保護者の就労状況の多様化により、地域コミュニティが希薄になっています。そのため、地域では、顔の見える安心な関係性や、多世代の交流が失われている状況があります。
- 子育て家庭にとっても、地域コミュニティが希薄になっていることで、近所の親同士や他の世代の人たちとの関わりがなく、地域で孤立しているような状況も少なくありません。
- そのため、かつてのように、ご近所さんが地域の子どもを見守ってくれたり、子どもたちが放課後に友だちの家に気軽に集まるのが難しくなっています。
- その結果、子どもも地域から孤立してしまい、子どもにとって、普段暮らしている地域は居場所と感じられる場所ではなくなっています。

中高生の居場所の現状

- 中高生年代の子どもは、区外の学校に通うことも多くなり、そこで多くの時間を過ごすようになるため、近所に一緒に過ごせる友だちが少なくなります。さらに、部活動や塾、習い事など、様々な活動に時間を費やし、忙しい日々を過ごしているため、ほっと一息ついたり、自由に過ごしたりするような時間的余裕も少なくなっています。
- また、中高生という年代は大人と子どもの間の存在であり、公園や児童館のような比較的年齢の低い子どもが中心となる場所も、大人が過ごすような場所も居づらさを感じ、この年代の子どもにとって、自分たちの居場所と感じられる場所が少なく、また、自分たちで居場所の

不足や必要性について声を上げることが難しいのではないかと考えます。

- しかし、この年代の子どもがこれから社会に出て自立していく中で、地域や社会に自分の居場所がないと感じることは大きな問題です。中高生年代の子どもが、体を動かしたり、勉強をしたり、のんびりしたり、自分らしく自由に過ごせる場所が必要であると考えます。

居たいと思う場所に居られない子どもたち

- 様々な要因から子どもの居場所が減少しています。子どもたちが今過ごしている場所は、居場所自体の減少や、様々なルールによる制約、地域の大人の目などから、居場所がなくなってしまった結果、そこで過ごさざるえないために過ごしている、本当に過ごしたい場所ではないことも考えられます。
- 本当に居たいと思う場所にいられない、やりたいと思うことができない状況は、子どもの権利の視点からも、非常に大きな問題であると考えます。

子どもの居場所の意義

- 社会構造の変化によって安心して過ごせる居場所が失われ、人とのつながりが希薄になっていますが、これらはいずれも子どもの成長に欠かせないものです。
- また、中野区子どもの権利に関する条例（以下、「条例」といいます）第19条第1項においても、「区、育ち学ぶ施設及び団体は子どもが安心して過ごすことができる居場所づくりに努めるもの」としています。
- 条例に基づいた子どもにやさしいまちづくりを推進するためにも、子どもの居場所が整えられ、子どもが休んだり、遊んだり、一人でまたは集まって活動したり、安心して自分らしく過ごすことができる居場所の充実が必要不可欠であると考えます。

子どもの孤独・孤立の防止

- 居場所がないことは、人とのつながりが失われ、孤独・孤立の問題と深く関係する重大な問題です。子どもが気軽に立ち寄り自分が過ごしたいよう

に過ごすことができ、自分を受け入れてくれる場所があること、信頼できる大人がいることが重要です。

- 自分の家が必ずしも安心できる居場所であるとは限りません。そういった子どもにとっても、安心して過ごすことができる居場所があり、必要に応じて支援につなげられるような環境があることも必要です。
- コロナ禍を経て、オンラインで気軽に会話などをすることができるようになりましたが、子どもにとって、直接他者と関わることは、精神的な孤独の解消につながります。

他者との関わりによる社会体験・社会参画の場

- 居場所は、子どもたちが安心して過ごすことができるだけでなく、社会参加や社会参画を体験する場にもなりえます。
- 放課後の遊びなどを通じて、自分たちでルール作りをするような、自分の意見を言い、反映される経験や、ほかの子どもと接することで、意見や思いの違いを知り、理解するといった経験をすることができます。
- 子どもの居場所が充実することは、子どもたちにとって、自己肯定感を培ったり、社会に居場所があると実感することができ、社会の一員として自立していく中で、欠かせない経験をするにつながります。

サードプレイスの充実の必要性

- 一般的に、子どもの過ごす時間は、家庭と学校が多くを占める場合が多いですが、それ以外にも、子どもが自分の良さを発揮できたり、それぞれの個性や性質を認めてあげたりすることができるような場所、いわゆるサードプレイスの存在は非常に重要です。
- 子どもにとって、サードプレイスは、学校の同級生ではない、学校や年齢も違う多様な他者と関わり、人間関係を構築したり、多様な価値観を知っていくことができる場所です。
- また、子どもは居場所が違えば良さが発揮できることもあります。それぞれの場所で見せる顔は違うため、様々な居場所が選択できる状況があるとよいと考えます。
- 子どもたちは、様々な思いを持っています。親には見られたくない、学校の先生には話せないなどの思いを持つ子どもにとって、サードプレイスに

信頼できる大人がいることは、自分の気持ちを話すことができ、安心して自分らしく過ごすことにつながります。

（２）中野区の子どもの居場所に関する現状

- 子どもと子育て家庭を取り巻く現状として、孤独・孤立への不安や児童虐待、不登校、いじめ、貧困など様々な課題が複雑かつ複合化し、共働き世帯の増加による学童クラブ需要の増加など、早急かつ重点的に多様な子どもの居場所づくりへの取組が求められています。
- 中野区では、令和4年4月の「中野区子どもの権利に関する条例の制定」、「中野区児童相談所の設置」に続き、子どもの成長に合わせた児童館やキッズ・プラザ、プレーパークなどの多様な居場所づくりを進めてきました。
- これまでの取組みを着実に前進させるとともに、子どもと子育て家庭の現状や課題、子どもの意見を踏まえ、多様な子どもの居場所づくりを早急かつ重点的に進めることが求められています。

中野区の子どもの居場所に関する施策（児童館のこれまでの経緯）

- 現在、中野区には18館の児童館があり、一部の児童館には施設内に学童クラブが併設されているなど、放課後の子どもの居場所となっています。中野区の児童館は、U18プラザの廃止など様々な経緯を経て、子どもや子育て家庭の現状を踏まえた児童館に求められる機能・役割を果たせるよう、開館日時の延長や、乳幼児親子や中高生向けに機能強化した児童館を配置するなどの取組を進めています。

中野区児童館運営・整備推進計画（令和6年3月）より抜粋

2-2 児童館の現状と課題

（１）これまでの経緯

- 中野区では、1966年以来、すべての児童の健全育成を目的として、小学校区ごとに児童館を配置するとともに、児童館内に学童クラブを併設し、一体的な運営を行ってきました。
- 2008年から、国の方針と方向性をあわせ、小学生の放課後の遊び場としてキッズ・プラザを展開することとし、小学生の安全・安心な居場所を小学校内に設置することとしました。

- 2010年3月に策定された「新しい中野をつくる10か年計画（第2次）」において、児童館は、9か所のU18プラザとすべての小学校に設置するキッズ・プラザに再編することとし、U18プラザとして展開しない児童館は、キッズ・プラザ整備後に廃止する方針としました。
- 2016年4月に策定された「新しい中野をつくる10か年計画（第3次）」においては、U18プラザを廃止することとしました。
- 2019年1月に「中野区の新たな区政運営方針」を定め、子どもと子育て世帯に対する地域包括ケアの地域づくりを進めるため、現在の児童館施設等を活用して、地域の子育て活動の支援拠点を適正に配置することとしました。
- 2021年3月に「中野区基本構想」、9月に「中野区基本計画」を策定し、「未来ある子どもの育ちを地域全体で支えるまち」を掲げ、子どもの学び・遊び・体験の充実のため放課後等の子どもの居場所づくりを進めてきました。
- 2021年10月に策定した「中野区区有施設整備計画」において、児童館は「新たな機能を備えた児童館」として、各中学校区に1施設の配置を基本としました。閉館する児童館については、学童クラブ施設への転用などを検討することとしました。
- 2021年12月に児童館4館を廃止する「児童館条例の一部を改正する条例」が区議会で否決されました。
- その後、子どもと子育て家庭にとって身近な地域の居場所である児童館について、現在の18館のうち一部を、乳幼児親子事業を主とした施設などに転用し機能強化を図ることを検討してきました。
- 2023年には、区民の意見やニーズ、区議会での議論などを踏まえ、児童館条例等に基づく施設としての位置付けを継続し、多様な居場所の重要性を踏まえ児童館の役割を見直すとともにソーシャルワーク機能（地域の見守り・ネットワーク・相談支援）、乳幼児親子向けの機能、中高生世代向けの機能を強化していくこととしました。

中野区の子どもの居場所に関する施策（公園）

- 中野区は、子どもから大人まで楽しめる”魅力ある公園づくり”を目指して、中野区公園再整備計画を策定しました。（令和4年）
- ボール遊びなど公園の利用ルールを見直していくことや、中規模公園を再整備し、子ども・子育て家庭のニーズに応じた遊具やトイレの整備、子どもにも大人にもやさしいユニバーサルデザインに対応した施設を進めています。
- 公園再整備にあたっては、近隣住民から意見を聴くワークショップやオープンハウス、小学校への出前授業などを経て、子どもから大人まで多様な意見を取り入れています。
- また、区内6公園では、地域団体が定期的にプレーパーク事業を実施しており、子どもが自由な外遊びをすることができます。さらに、区では初となる「常設型」プレーパークの開設を令和7年度に予定しています。（区立江古田の森公園内）

その他の中野区の子どもの居場所に関する施策

子育てひろば

- 乳幼児と保護者の方などがのんびり過ごしたり、同年齢のお子さんと遊ばせたり、また、子育てのことで悩んだり迷ったりしたとき、同じ子育て仲間と気軽におしゃべりしながら、情報交換することもできる場所です。

放課後子ども教室

- 地域の団体が、学校施設や公共施設等を活用して、放課後や土日休日に子どもたちの安心で安全な活動の拠点を提供しています。小学生を中心に、幼児や中学生も参加でき、活動内容は、スポーツ、文化活動、創作活動、地域住民との交流活動などがあります。

みらいステップなかの(まごころドーナッツ)

- 子ども・若者支援センター、教育センター、中野東図書館の複合施設です。施設内には、若者が自由に過ごせる居場所として「まごころドーナッツ」も開設されています。義務教育終了後から39歳までの方が対象で、プログラムへの参加やその他自由に過ごすことができます。

図書館

- 区内に10か所ある図書館では、様々な子ども向けの企画が行われていたり、子どもの学習スペースが設けられている館もあります。中野東図書館にはこどもフロアがあり、中高生がグループでの学習や話し合いをすることができるティーンズルームなどがあり、乳幼児親子や子どもが利用しやすい施設となっています。

子どもの学習スペース

- 図書館のほかにも、一部の児童館や教育センター分室には、子どもの学習スペースがあります。区のホームページや案内チラシも作成されており、利用できる時間や席数、Wi-Fiの有無などを一覧で見ることができます。

学習支援事業、子ども食堂支援

- 区は、低所得世帯の小学校4年生から中学校3年生までの子どもを対象に、無料塾を実施し、生活に課題のある子どもの学習環境を整えています。
- 地域の団体により、主に家庭の事情により生活に課題を抱える地域の子どもたちへの食事及び交流の場として子ども食堂が運営されています。区は、子ども食堂を運営する団体への支援を行い、安定した実施や地域に根差した活動を支援しています。

中野区役所

- 令和6年5月に移転した中野区役所新庁舎の1階は、区民交流スペースとして開かれており、誰でも自由に利用することができます。大人だけでなく、子どもが自習やお喋りなどで利用する姿が見られるようになりました。

区有施設や再開発による権利床などの活用

- 区は、区有施設や再開発事業による権利床の一部などを民間事業者に貸付けるなど民間活力の導入を進めています。貸付にあたっては、地域への貢献などを求めています。
- 旧本町図書館暫定貸付：民間事業者によるフリースクールの運営
- 中野二丁目再開発権利床（ナカノサウステラ内「NAKANO HAKO」：様々な交流ができる地域情報交流スペースや、勉強や仕事に活用できるコワーキングスペースの設置。子どもの日などにあわせた学習スペースの提供。
- 中野セントラルパークイースト賃借床（絵本ラウンジ L00P 中野）：子どものための絵本ラウンジ。0歳～18歳までの子どもは無料で入館可能。

子どもの意見からみた中野区の子どもの居場所に関する現状

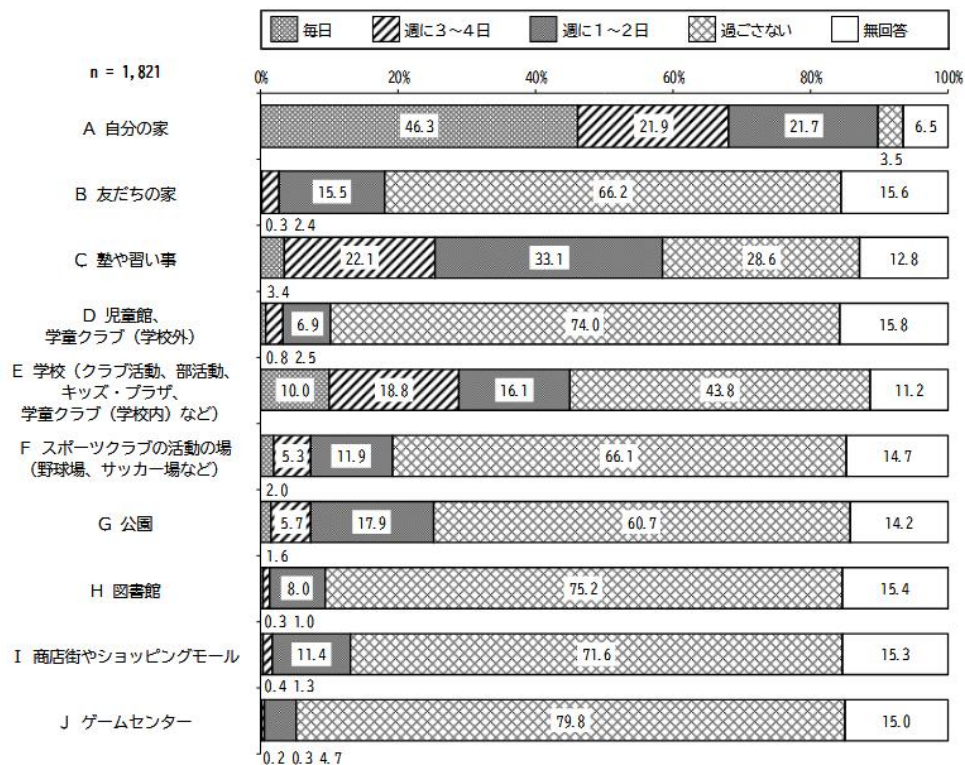
- 区が令和6年度に実施した「令和6年度中野区子どもと子育て家庭の実態調査」では、小学校4年生から中学3年生までの子どもにアンケートを行っています。
- 調査の中から、平日の午後に過ごしている場所や、ほっとできる居場所、中野区の遊ぶ場所の環境への満足度など、子どもの居場所に関する設問の結果について確認しました。
- また、区が実施しているハイティーン会議においても、ここ数年、「中高生の居場所」をテーマに活動するチームがあり、中高生の居場所の必要性や中高生年代向け施設の早期整備について、区長に意見表明がされています。

令和6年度中野区子どもと子育て家庭の実態調査【概要版】より抜粋

(2) 平日の放課後に過ごす場所

子ども全体で「毎日」は【A 自分の家】が46.3%で最も高くなっている。「週に3～4日」は【C 塾や習い事】が22.1%で最も高く、次いで【A 自分の家】が21.9%、【E 学校（クラブ活動、部活動、キッズ・プラザ、学童クラブ（学校内）など）】が18.8%となっている。一方、「過ごさない」は【J ゲームセンター】が79.8%、【H 図書館】が75.2%、【D 児童館、学童クラブ（学校外）】が74.0%、【I 商店街やショッピングモール】が71.6%となっている。

<子ども全体>平日の放課後に過ごす場所

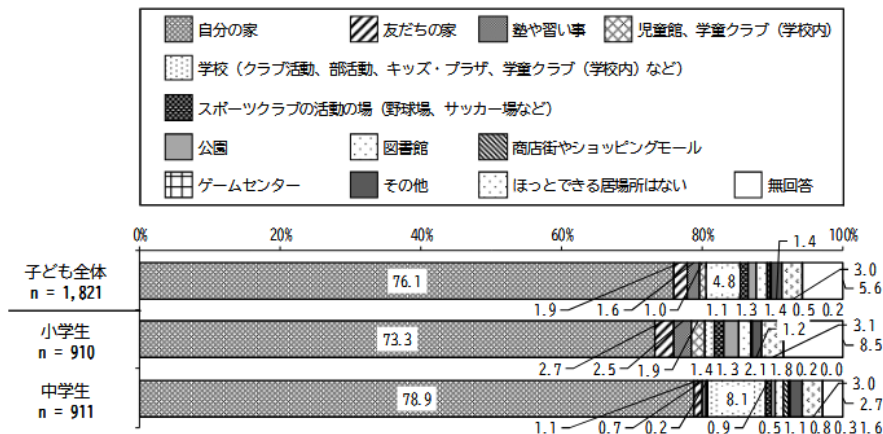


(3) 一番ほっとできる居場所

子ども全体では「自分の家」が76.1%となっている。

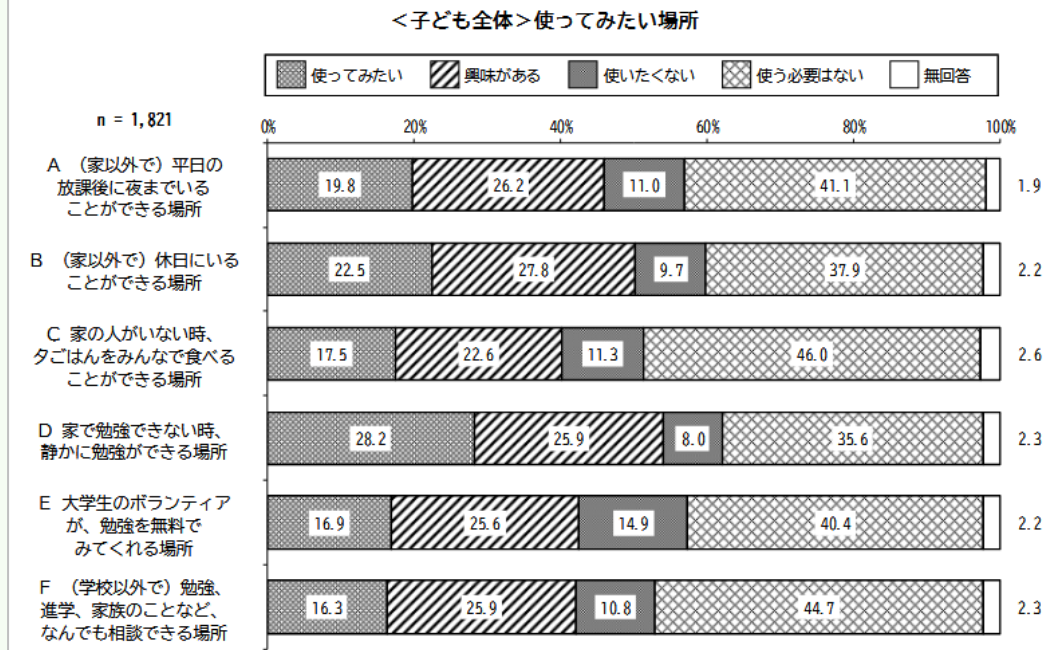
小学生、中学生別にみると、「学校（クラブ活動、部活動、キッズ・プラザ、学童クラブ（学校内）など）」は【中学生】が8.1%と、【小学生】（1.4%）に比べ、6.7ポイント高くなっている。

<子ども>一番ほっとできる居場所

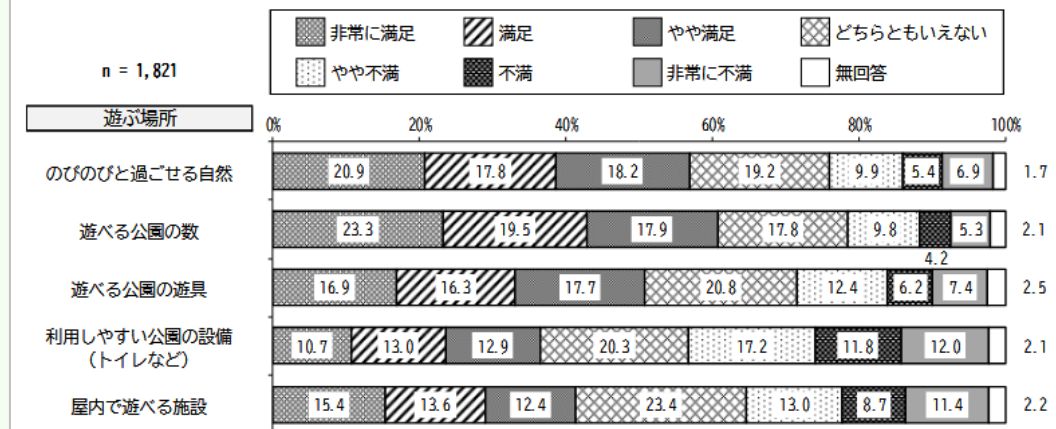


（6）使ってみたい場所

子ども全体で「使ってみたい」は〔D 家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所〕が28.2%、〔B（家以外で）休日にいることができる場所〕が22.5%となっている。また、いずれの項目も「興味がある」が22～28%となっている。



（2）子どもから見た中野区的环境について



2 子どもの居場所のあり方

子どもの居場所に必要なこと

- 子どもの居場所について大人が考える際、子ども自身にとって居場所と感
じるかどうかを最終的に決定するのは子ども自身であることを念頭に置
く必要があります。そのために、子どもの視点や子どもの主体性を大切に
した居場所づくりが求められます。
- また、子どもの居場所は、子どもにとって居心地がよく、安心できる場所
であることが必要です。安心という観点から、居場所が突然なくなってし
まうことがないよう、新しく居場所をつくるだけでなく、居場所が維持さ
れ、継続されていくことも重要です。

多様な子どもの居場所をつくる

- 価値観の多様化やそれを受け入れる文化の広がりに伴い、多様なニーズに
応じた多様な居場所が求められるようになっていきます。多様な居場所をつ
くることは、子どもの権利が守られ、条例に基づいた子どもにやさしいま
ちづくりの推進につながります。
- 家庭や学校など、子どもが多くの時間を過ごす場所が、子どもにとって安
心できる場所であることが重要です。一方で、子どもたちがそれぞれの思
うように過ごせるよう、様々なサードプレイスが充実していくことも重要
です。
- 子どもの居場所には様々な特徴があります。それぞれのメリットを把握し、
子どものニーズや地域の状況から、どんな居場所が必要か検討する必要が
あります。
- 例えば、目的に沿った場所は、それをやりたいと思っている子どもにとつ
ての居場所となります。同様に、特定の場所でなくても、活動に基づく集
まりは、興味関心が同じ子どもが集まることができ、そこでできあがった
人間関係は、結果として子どもの居場所となります。一方で、何も目的が
なくても、一人や、友だちと一緒に、自由に過ごしたいように過ごすこと
ができるような場所も、子どもにとって安心できる居場所になります。
- また、誰でも利用できるオープンスペースは、開かれた場所であり、予約

などの手続きがなく気軽に利用できるため、子どもにとって気軽に立ち寄れる居場所になります。一方で、子ども向けの施設のような場所も、子どもだけで利用できることや、必要な時には大人が相談に乗ってくれるなど、安心して過ごせる居場所になります。

中高生の居場所のあり方

- 対象としている子どもの年齢に合わせた居場所づくりも重要です。
- 特に中高生は、様々な趣味や価値観を持っており、学校や部活動といった大人主導の枠組みではない、自らの好みに応じて活動できる自由な居場所をつくる必要があります。中高生は大人と子どもの間の存在であり、居場所と感じられる場所が少ない現状があることから、この年代の子どものための施設を作ることや、既存の施設を利用しやすくすることなどについて検討が必要であると考えます。
- また、この年代の子どもは様々な悩みや課題を持っています。気軽に相談ができたり、必要な支援につなげることができるよう、専門性のある大人がいる場所があることも重要であると考えます。

子どもの意見を聴いて居場所をつくる

- 子どものニーズに沿った居場所が作られるために、子どもの意見を聴く必要があります。その際は、声を上げにくい子どものニーズも拾うよう工夫が必要です。
- 子どもが、自分の意見を言えること、言った意見が反映されたり、フィードバックされる経験をすることは非常に重要です。主体的な関わりを通じて、子ども自身が主体であるということを実感し、子どもの権利を守ることにもつながります。

居場所と子どもをつなぐ

- 地域にある子どもの居場所が、子どもや保護者に知られるよう、情報発信を行うことが重要です。
- 特に、子どもにとっても分かりやすいよう情報が整理されているか、また、対象年齢や施設の特徴、その場の様子や過ごし方など、子どもがイメージできて、行きたいと思うような情報になるよう工夫する必要があります。

- また、保護者や学校の先生などの周りの大人から勧められて利用につながることも考えられます。子どもを取り巻く関係者も、子どもの居場所について把握できるような情報発信も求められると考えます。

居場所にいる大人について

- 子どもが安心して過ごすためには、居場所にいる大人の存在が重要であると考えます。真剣に向き合ってくれる大人がいることが、子どもにとって安心できる居場所につながります。そのため、居場所にいる大人が、子どもの権利について理解を深める必要があります。
- 子どもが安心して過ごしたり、子どもが抱える課題に気づくことができる大人の存在は重要である一方、そういった人材の育成には課題があります。また、子どもの居場所を考えるにあたっては、大人自身の居場所があるかについても考える必要があるのではないのでしょうか。

既存の居場所の見直し

- 新しい居場所をつくるだけでなく、児童館や公園をはじめとした、今ある子どもの居場所についても、子どもの意見を聴きながらルールを見直していくなど、子どもがより利用しやすい居場所にしていく必要があります。